国際交流基金アジアセンター
アジア・フェローシップ報告書
山下　彩香

最終報告書レポート

竹×アート×伝統と革新×地域活性化をテーマとしたネットワークの構築に向けたベトナム、インドネシアでの調査

1.　プロジェクト概要

本プロジェクトは、竹×アート×伝統と革新×地域活性化をキーワードとし、ベトナムとインドネシアの2カ国で、関連する活動の調査や関係者との交流を実施することで、竹から広がる文化的で未来的なネットワークの将来的な構築を目指したものである。具体的には、(1) 工芸分野での伝統と現代の可能性を融合させたコンテンポラリーアートを展開し、社会的起業のような形でも展開する活動や、(2) 伝統的な竹具や建築、音楽や踊りなどの調査や保存などを行う村落開発にも近いアート活動あるいは、(3) 地域の人々も参加者として交えつつ地域活性化にまで竹を絡めているソーシャリー・エンゲージド・アート寄りの活動を念頭に調査・交流を実施した。

2.　フェローシップ活動記録

＜＜実施概要＞＞

期間	活動地・活動拠点	活動概要
4/16-4/17	ハノイ （ベトナム）	羽田空港より約5時間のフライトを経て、ハノイに到着。初日に、基金現地事務所を訪問し、活動へのアドバイスをいただいた。翌日、民族学博物館を視察し、ベトナムの少数民族に関する知識を深めた。
4/18-4/24	サパ	ハノイより、バスで 5-6 時間ほど北上し、サパへ。さらに車で 3-4 時間の場所にあるシンホ周辺の少数民族の村々を 3 日間かけて視察したのち、タフィンの赤ザオ族の村に 2 日間滞在した。ホームステイをし、竹と人々の暮らしのつながりや、文化について調査した。
4/25	マイチャウ	受入協力者 Ms.Ha の助言を受け、竹林が多いというマイチャウを訪問。
4/26-4/27	ホーチミン	国内線を使い、ハノイからホーチミンへ。Lune Production の竹サーカス Teh Dar の鑑賞や、プロデューサーの Cao Minh Phuong 氏へのインタビューを行った。Dr.Mh Hanh が主宰する PHU AN BAMBOO VILLAGE には終日訪問し、意見交換を行った。
4/28	移動日	ホーチミンから、国際線でクアラルンプールを経由して、バリへ。
4/29	バリ （インドネシア）	竹×アート×伝統と革新×地域活性化の大規模なプロジェクトでもある、Green Village ならびに Bamboo Factory を視察。
4/30-5/4	フローレス島	国内線を使い、マウメレを経由して、主にバジャワにて調査を行った。
5/5-5/7	アロール島	国内線を使い、クパン経由でアロール島へ移動。アブイ族の村々で、地域での竹の使われ方の調査を行った他、竹製品を扱う工房の視察を実施した。竹楽器演奏団 Marawah との交流も行った。
5/8	ティモール島	クパンにて、元々はロテ島の伝統竹楽器であるササンドゥの工房を訪問し、楽器制作者/演奏家の John Pah 氏と交流。国内線でジャカルタへ移動。
5/9	ジャカルタ	基金現地事務所を訪問。
5/10	移動日	ジャカルタより国際線で羽田空港へ。日本帰国。

＜＜ハノイ 4/16-4/17＞＞

ハノイ到着後すぐに現地事務所を訪問し、今回のテーマへの助言をいただくとともに、Lune Production の関係者を紹介していただいた。

続く 1 日は、ハノイの竹通り HangVain 通りや民族学博物館を訪れるなどして、ベトナム 54 の民族の日常生活（過去～現在に至るまで）と竹の関わりの概要を把握するように努めた。Hang Vain 通りには、竹を扱うお店が何軒か連なっており、どの店でも、竹材や竹製品（はしご、タバコ用のパイプなど）など、似たようなものを販売していた。民族学博物館は、内部展示・外部展示ともに非常に充実しており、各民族の地理的分布と各文化の特徴を把握するには最適な場所であった。実際、多くの民族が、建材や民具として竹を利用していることがわかり、東南アジアを竹という切り口で把握していくことの面白みを改めて感じた。

また、今回の受入協力者である Ms.Ha から急遽提案があり、当初予定していなかったホアビン省マイチャウに、サパ訪問後訪れることを決め、その予定の調整を行った。Buoc 村に Ha Van Nhiem Homestay というところがあり、そこのオーナーが竹に詳しいということだったが、調整がつかず、今回は Lac 村を訪問した。

Ms. Ha からは他にも、竹に関心を寄せるベトナム国内の関係者として、ホイアン省にある竹製品の工房 Tatoo Bamboo Workshop やザライ省にある PLEI JRAI、タインホア省に最近できた Thanh Tam Bamboo Ecopark の存在を教えてもらったが、今回は時間の関係で訪問が難しく、今後また機会があれば訪問したいと考えている。

↑上3枚：民族学博物館の様子

↑HangVain 通りの様子

＜＜サパ 4/18-4/24＞＞

ハノイより、バスで 5-6 時間ほど北上し、ラオカイ省サパへ。サパは、私がこれまで活動を 9 年ほど継続して行っているフィリピンのバギオとも雰囲気の似た、山岳地帯にある少数民族の町である。最近では、ベトナム国内からの観光客に留まらず、トレッキングや少数民族との触れ合いを求めた欧米系の観光客も多く、小さな町ながら、いたるところが工事中、建設ラッシュとなっていた。

↑サパの様子

サパ到着翌日からは、そこから車で3時間ほどのライチャウ省シンホを中心に、周辺の少数民族の村々を 3 日間かけて視察した。まずは、観光地化されていない少数民族の暮らしの中で、竹がどのように使われているかを知ること、また近代化などの影響による暮らしの変化を観察すること目的であった。そうすることで後日、タフィンなど、より観光地化が進み、「竹×アート×伝統と革新×地域活性化」の文脈での活動が生まれつつある場所をより相対的に、調査することができると考えた。

↑Hoang Say May さんへのインタビューの様子

まずはシンホへの向かう途中で、Tam Duong エリアにある村 Thon Hau Thao へ行き、黒ザオ族の Hoang San May さんの家を訪問した。ここでは、伝統的な竹の民具を観察することはできたが、アートの文脈と結びつけることは出来なかった。竹は、籠や柵、建材として、アートというよりは、日常的に使われていた。赤モン族の村 Sa Re Phing では、ホームステイをすることとなった家のおばあさんがシャーマンで、家に祭壇がおいてあった。ここでも竹は、民具に使われていた。

↑赤モン族の村へ向かう様子。左手に竹あり。

日曜日にシンホで行われていたサンデーマーケットでは、黒ザオ族、赤モン族、白モン族、タイ族などに遭遇することができた。赤モン族は、スカートを履いており、白モン族は長パンツが特徴だ。タイ族は頭に載せるスカーフが特徴的であった。30cm 程度に切った、直径 5-6cm の竹を販売している人がいたが、購入する人は、その竹を裂き、紐の代わりとして使うとのことだった。

↑マーケットの様子。日常的に竹籠を利用。

次に、サパ近郊のタフィンにある赤ザオ族の村に 2 日間滞在した。観光地化は日々進み、トレッキングツアーのガイドしたり、手工芸品を観光客向けに販売する、赤ザオ族の女性を多く見かけた。ゲストハウスのような宿泊施設もいくつかあり、さらには、村の共同組合が薬草風呂の施設を営するなど、「伝統と革新×地域活性化」への働きかけの動きを感じることができた。「竹×アート」という限定的なアプローチを加味しても、例えば、竹籠編みを体験ツアーのコンテンツの一部にするなど、(2) 伝統的な竹具や建築、音楽や踊りなどの調査や保存などを行う村落開発にも近いアート活動、に近い活動も行われていた。現時点では、それ以上でも以下でもなかったが、竹が多く生えている地域でもあり、今後、より竹を資源として、村落開発×アートのコンテンツ発展させていける余地はあると感じた。

実際の活動としては、タフィン到着後すぐ、まずは Nguyen 氏が主宰する太鼓工房を訪問した。40 年間制作に携わっており、65 歳とのことだった。その後、64 歳で竹籠編みを約 30 年続けている職人 Phan Clao Nhan 氏のもとで、竹籠編みを、終日教わった。まだ 100 軒ほどが竹籠を作ることができるが、職人の多くが年配で、若い人が全く関心を持たないことが問題だと話していた。多くの若者が熱中しているのが、携帯電話のゲームとバイクの乗り回しだという。なお、竹籠作りは 1 日では終わらず、次の日の朝に仕上げを行った。

2 日目は、タフィンの中でも黒モン族がより多く住むエリアへも足を伸ばしてみた。タフィンには、13 の村があり、赤ザオ族と黒モン族が寄り添って暮らしている。竹林訪問や、暮らしの中での竹の使われ方の観察を行った。

↑竹籠職人の Phan Clao Nhan 氏と村の若手リーダーLy Lp May さんに竹籠作りを教わる山下

↑赤ザオ族の行商をする女性たちの井戸端会議。

↑黒モン族の畑。柵に竹を使っている。

↑竹林の様子。

＜＜マイチャウ　4/25＞＞

受入協力者 Ms.Ha の助言を受け、竹林が多いというマイチャウを訪問した。途中ムオン族のマーケットにも寄り、竹筒に入ったご飯を食べることができた。これは、醤油で薄く味がついたご飯を、砕いたピーナッツをまぶしながら食べるというもの。ちなみに、以前、ミャンマーを訪れた際にも同じように竹筒に入ったご飯を食べたのだが、こちらはココナッツ風味であった。

マイチャウにはタイ族が暮らしており、確かに、たくさん竹が育っていた。そして、暮らしの中で、竹は民具や建材として使われていた。マイチャウでもタフィン同様、少数民族の暮らしぶりを体験するコミュニティーツーリズムが盛んに行われている。土地が平坦であることもあり、のどかな風景の中を自転車で巡るといったようなコンテンツが人気であった。なお、訪問の時点では、タフィンでの竹籠作りのように、「伝統と革新×地域活性化」に「竹×アート」を掛け合わせたコンテンツは見当たらなかった。どちらかというとのんびり田園風景を満喫する、というところに、コミュニティーツーリズムの重点を置いているように思った。

↑ムオン族の竹筒ご飯

↑タイ族の高床式の家

↑家の中の壁や床も竹で制作

↑村の様子。左手には竹あり。

＜＜ホーチミン　4/26-4/28＞＞

ベトナム後半のハイライトとしては、ホーチミンでの Lune Production のプロデューサーCao Minh Phuong 氏との出会いと、Dr.Mh Hanh が主宰する PHU AN BAMBOO VILLAGE への訪問を挙げたい。

Lune Production は、(1)工芸分野での伝統と現代の可能性を融合させたコンテンポラリーアートを展開し、社会的起業のような形でも展開する活動、を竹サーカスという形で展開している。特に鑑賞した TEH DAR はサパ近郊の少数民族文化を主コンテンツとしていたこともあり、プロデューサーの一人である Cao 氏に直接、劇団の成り立ちや演目の背景について聞くことができたのは、大変意義深かった。なお、Cao 氏は Lune Production の S.E.A Sound project（少数民族による伝統×革新をテーマとしたコンサートプロジェクト）も担当しており、将来のコラボレーションの可能性まで含めて話をすることができた。

PHU AN BAMBOO VILLAGE は、(3) 地域の人々も参加者として交えつつ地域活性化にまで竹を絡めているソーシャリー・エンゲージド・アート寄りの活動、の実践先として訪問した。現時点の PHU AN BAMBOO VILLAGE はベトナム中から集められた竹を一同に観察できる場所として、また観光地としても人気を集めている。主宰する、竹の植生の研究者である Dr.Mh Hanh との対話では、彼女らが今後の動きとして、PHU AN BAMBOO VILLAGE を基点としつつも、コミュニティを巻き込み、竹を植えることを通して、地球温暖化など大規模な問題を解決していきたいと考えていることを知った。スケールの大きな話に触発されるとともに、こちらでも、将来的なコラボレーションの話が持ち上がり、未来への足がかりを作ることができた。

↑上3枚：Phu An Bamboo Village にて

↑Dr.Mh Hanh ご自宅のコレクション

＜＜バリ 4/29＞＞

竹×アート×伝統と革新×地域活性化の大規模なプロジェクトで、(1)(2)(3)を横断的に実現していると考えられる、Green Village ならびに Bamboo Factory の2つを視察した。Green Village では2つの家を実際に視察することができた。地下まで含めると 3-4 階建てとなるこれらの家は、その多くの部分が竹を材料に作られており、しかも非常にモダンで洗練されたデザインとなっていた。制作には、1軒あたり、15-20 人の大工を動員する計算で、1 年半ほどかかるとのこ、とだった。予算は 1.5 億円程度とのこと。

Bamboo Factory では、以前より知りたいと思っていた、竹を建材として生かしていくための、処理プロセスを順を追って、学ぶことが出来た。

↑ Green Village にある家の内部

↑ 上2枚：Bamboo Factory にて

＜＜フローレス島　4/30-5/4＞＞

バリより国内線で 2 時間ほどでマウメレに到着。当初は、受入協力者である Ms.Ayuningtyas が主宰する社会的企業の、カウンターパートとなっているコミュニティがララントゥカ近郊にあることもあり、今回の活動先として、フローレス島を選定していた。マウメレより、ララントゥカへ移動し、そこを基点として、アドナラ島を訪問したあとアロール島を訪問するプランを考えていた。そんな時、偶然、オーストラリア人の音楽療法士と出会い、バジャワという、先住民ガダ族が多く住む場所で、竹も多くあるところがあるということを知った。アドナラ島のバンブーダンスがフィリピンのものと非常に似ており既視感があったこと、また Ms.Ayuningtyas の調整がつかなくなってしまったこともあり、私にとっては未知の世界である、ガダ族の調査に向かうことに決めた。

マウメレからバジャワまでは、陸路で約 10 時間の距離である。ほぼ終日移動の工程を経て、翌日から早速、ガダ族の村の視察を行った。Bela 村、Luba 村、Bena 村の3つを訪問し、伝統的なガダ族の住居や暮らしぶりを知ることが出来た。竹は主に建材として使われていた。フローレス島の他の地域と比べても、太めの竹が非常に多く生えている印象を得たエリアではあったが、実際は建材以外には、ほぼ活用されていないことも、特徴的だと感じた。

ガダ族出身で、Flores Village Partners という NGO のプロジェクトオフィサーを務める Moses Jala 氏と話す機会があったのだが、やはり、バジャワで竹が建材以外に利用されている事例は、あまりないとのことであった。しかし、竹の数は多いため、今後のより有効な竹の活用のために、ジャワ島から講師を呼ぶなどの試みが少しずつはじまっている、とのことであった。

↑竹を伐採する様子。

↑Bela 村。平らな方の屋根は竹でできている。

↑Luba 村にて。縁側の床も竹。ガダ族は布が有名。

↑Bena 村全貌。

＜＜アロール島　5/5-5/7＞＞

アロール島へは、フローレス島から直接はアクセスできないため、一度、州都であるティモール島のクパンへ飛び、そこからアロール島へ向かう必要があった。島間の移動はプロペラ機で、飛行機の時間変更なども頻繁に起こっているようであった。実際、私も、行きの午前便がトラブル発生で午後便に変更となった他、帰りの午後便は午前便に吸収され、時間変更となるなど、変更への対応を余儀なくされた。また、5/5 はラマダン初日でもあり、そこここでラマダンの話を耳にした。

アロールは 15 の島からなり、うち9つの島には人が住んでいる。メインのアロール島で調査した他、テルナテ島とプラ島にも上陸した。テルナテ島やプラ島では、漁業が生業であり、Bubu という名の竹で編んだ仕掛け網を、至る所で見かけた。またパンダナスで編むお皿や籠の制作も盛んで、少し編み方を教わった。

アロール島では、アブイ族の中でも、木の幹から服を作る Kabola 村や、伝統文化が色濃く残る Takpala 村を訪問した。竹は主に、建材や民具としての使用であった。加えて、Takpala 村では、Mai Packing という竹楽器（フィリピンのカリンガ族の竹楽器クリトンと似ている）とも出会うことが出来た。他にも、Ril（口琴）、モコドラム、ゴングなどの演奏を聞かせてもらった。Lawahing 村では、Jordan Bamboo Workshop も含め2カ所の竹製品工房を訪問し、職人から話を聞いた。

なお、アロール島のハイライトは、竹楽器演奏団 Marawah との交流である。5種類の竹楽器 Suling, Kalitang, Bambu Serah, Matawa, Bomberdom と打楽器 Tambur の演奏を聞かせてもらうことが出来た。

↑Bubu。どの家の前でも見かけた。

↑パンダナス編みに挑戦。

↑木の幹で作った服をトライ＠Kabola 村

↑Takpala 村で伝統ダンスを鑑賞。

—アロール島で出会った竹楽器—

↑ Suling

↑ Matawa

↑ Kalitang

↑ Mai Packing

↑ Bambu Serah

↑ Ril

↑ Bomberdom

＜＜ティモール島　5/8＞＞

ティモール島の西部に位置し、東ヌサ・トゥンガラ州の州都でもあるクパンを訪れたのは、元々はロテ島の伝統竹楽器であるササンドゥの工房を訪問したかったからである。楽器制作者であり演奏家の John Pah 氏と会うことが出来、話を聞いた。先代が、元々のササンドゥを進化させ、ドレミファソラシドの音階を奏でることを可能にし、コンサートなどでアンプに繋いで演奏することも可能にしたとのこと。それにより、ササンドゥが一躍有名になったと聞いた。

3.　今後の予定や展望

将来的な、竹×アート×伝統と革新×地域活性化をテーマとしたネットワークの構築に向けた布石としての調査・交流という位置付けでの今回の訪問は、非常に意味のあるものだったと思う。日数の制限もあり、ワークショップやイベントの共同実施というところまではできなかったことは心残りだが、フェローシップ前には念頭にあった Bamboo Glocal Village のプロジェクトを通してのネットワーク構築以外にも、別の媒体（例えば竹楽器など）を使っての新たなネットワーク構築のアイディアなども今回のフェローシップ活動を通して生まれ、次ステップまでを、今回で一気に遂行しなかったことのプラス面もあると思う。今回の経験を生かして、この次にどんな企画を具体化できるかが、真の意味では、今回のフォローシップの成果を評価することとなるだろう。

また、今回のフェローシップでの学びや新たな機会への萌芽を、私ひとりのものとするのではなく、当初の目的でもあるネットワーク構築という言葉が示すように、日本＋東南アジアの仲間（これまで共に活動してきた人も、今回新たに繋がりをもった人も含めた意味での仲間）で共有していくことができるように、今後も行動し続けて行きたいと考えている。